

ディケンズにおけるユダヤ人とキリスト教徒

key words : フェイギン、ライア、スクルージ、ユダヤ人像、キリスト教精神

長谷川雅世

序

最近公開されたポランスキー(Roman Polanski)監督による『オリバー・ツイスト』(2005)で、ベン・キングズレー(Ben Kingsley)がユダヤ人のフェイギン(Fagin)を好演した。この作品では、リーン(David Lean)監督の『オリバー・ツイスト』(1948)で存分に描かれていたフェイギンの醜悪さや誇張された鉤鼻は見られず、反ユダヤ的な描写のみならずフェイギンのユダヤ性自体が排除されている。ポランスキーが、ゲッターに辛い思い出を持つユダヤ系ポーランド人監督であることを考えれば、暴動さえも引き起こしたリーンのフェイギンが影を潜めたのも当然かもしれない。しかしフェイギンは、その強烈な個性以上にユダヤ人であるがゆえに注目を集めてきた人物である。

ディケンズのユダヤ人やユダヤ人観は、レーン(Lane)やストーン(Stone)をはじめとする多くの批評家によって研究されてきた。そして、議論の中心はいつも『オリヴァ・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837-38)のフェイギンと『互いの友』(*Our Mutual Friend*, 1864-65)のライア(Riah)だった。一方、旧約聖書の住人だと指摘される(Davis 79-80)『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*, 1843)のスクルージ(Scrooge)は、ユダヤ人やユダヤ人的人物として名前を挙げられることがほとんどない。確かに、少数ながら、ヴォーゲル(Vogel)やグロスマン(Grossman)のようなスクルージのユダヤ性を積極的に扱っている批評家はいる。しかし、ヴォーゲルの場合、スクルージのユダヤ性からディケンズのユダヤ人観へと議論は発展しない(140-44)。また、グロスマンの場合は、スクルージの改心を不完全なものと捉えることで、彼のような変化を読者に求めるというこの小説の最大の意義を歪めている(49-53)。

そこで、本論文ではスクルージのユダヤ性をディケンズの道徳的主張との関係で読み解き、『クリスマス・キャロル』がディケンズのユダヤ人観を伝える作品であることを明らかにする。そのために、最初に、フェイギンとライアの人物造形を考察し、その後それらをスクルージの人物造形と比較する。さらに、そのなかで、前期小説と後期小説に共通する作者のユ

ダヤ人に対する態度と、その変化を検討する。

1. フェイギン

フェイギンは、^ス紋切^ジ型のユダヤ人の特徴である赤毛と大きな鉤鼻をしている。また、彼は悪魔の別称である「老紳士」を变形させた「陽気な老紳士」(63)という渾名をつけられ、ユダヤ人が悪魔の化身と見なされてきたように、悪魔に喩えられている。フェイギンは「強欲なガリガリ亡者の飽くことを知らない盗人ジジイ (covetous, avaricious, in-sa-ti-a-ble old fence)」(95)とも呼ばれ、『ヴェニス^ジの商人』(*The Merchant of Venice*, 1596)のシャイロック (Shylock) に代表される欲深い守銭奴というユダヤ人像の原型にも当てはまる。彼は多くのユダヤ人が実際に生業としていた「盗品故買人」である。さらに、彼がオリヴァを墮落させようとするのが、「オリヴァの魂にゆっくりと少しずつ毒を流し込もう」(147)としたと表現される。ここには無垢な子供殺害のイメージがあり、『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*, 1387-1400)でも言及されているリンカーンの聖少年ヒューの話 (7: 684-86) のような、ユダヤ人による純粹無垢なキリスト教徒の子供殺しの伝説を想起させる。

このようなフェイギンは、名前ではなく「ユダヤ人」と繰り返し呼ばれ、彼がユダヤ人の代表的存在だという印象を与える。それゆえ、フェイギンは「離散しているとはいえ一体である (我々ユダヤ民族に対する) ひどく不当な扱い」だという、デイヴィス夫人 (Mrs Davis) からの作者への抗議も当然だろう (*Letters* 10: 269)。ただし、ディケンズはフェイギンを通して意識的に自身の反ユダヤ的感情を表明したり、読者の反ユダヤ主義を煽ろうとしたわけではない。というのも、この小説におけるフェイギンの存在理由は、ユダヤ人の邪悪さや劣等性を語ることにないからだ。

小説中でフェイギンはキリスト教徒たちと対比される。当然、オリヴァはその1人である。最終場面に「神に心から感謝を捧げている」(439)姿で現れるオリヴァは、純粹無垢なキリスト教徒の子供の典型として描かれている。一方、フェイギンはオリヴァを墮落させようとする悪魔的な老ユダヤ人である。この対照関係を通して、フェイギンの醜悪さと同時にオリヴァの純粹さと善良さが明示されている。また、裁判所で倒れたオリヴァを助けて看病する「老紳士」ブラウンロー氏 (Mr Brownlow) と、行き倒れのオリヴァを助けたあと、彼を窃盗集団の一味にしようとした「陽気な老紳士」フェイギンも対照関係にある。この対照関係によって、ブラウン

ロー氏の「良きサマリア人」の性格が強調される。

しかし、フェイギンとキリスト教徒との関係は、常に対立的なのではない。「教区の印」である「良きサマリア人」(27)模様のボタンを自慢しながら孤児をいじめる教区吏バンプル(Mr Bumble)に連れられ、オリヴァが救貧委員会との面会に行く場面がある。この場面で、「丸々と太った(9)委員の1人が、満足な食事を与えられていないオリヴァに、「キリスト教徒らしく」(10)孤児を養ってくれている人たちへ感謝のお祈りをしているのだろうと言う。続けて、「赤ら顔の紳士」が「おまえは教育を受け、役に立つ仕事を教えてもらうためにここに来たのだぞ」(10)と述べ、オリヴァに「ロープをむしりまいはだ槓皮を作る(pick oakum)」(10)仕事を命じる。これに対して、「赤毛の陽気な老紳士」フェイギンは、「槓皮を作る」仕事の代わりに、盗んだハンカチから頭文字などの刺繍を「抜き取る(picked out)」(67)方法を教え、次に「スリ(pickpocket)」の手ほどきをする。救貧委員たちとフェイギンとは類似した者として描かれている。また、フェイギンは、動機はどうあれ行き倒れになっていたオリヴァに暖炉の火と食べ物と寝る場所を与えている。これは救貧委員たちに期待できない行為である。ディケンズはフェイギンと比較することで、救貧委員たちの偽善や愚劣さや無慈悲を露わにし、キリスト教徒らしからぬキリスト教徒を非難している。

フェイギンとの対比関係を通して、ディケンズは彼にとって「親切で慈悲深く寛大であることを意味するキリスト教徒的精神」(*The Life of Our Lord*, 54)の持ち主であるキリスト教徒を称え、その精神を欠いたキリスト教徒を非難している。そして、この称揚と非難は共に、キリスト教精神の大切さを説くことに繋がっている。従来 of 批評では、フェイギンのユダヤ性に焦点が絞られ、彼を個別に考察することが多かった。しかし、彼はキリスト教徒の登場人物たちとの関係のなかで検討されるべき人物である。なぜならフェイギンは、キリスト教徒とキリスト教精神について語るために存在しているからだ。

2 . ライア

前期小説のユダヤ人が悪魔的なら、『互いの友』のユダヤ人ライアは天使のようである。ユダヤ人が悪から善の権化になった理由について、フォースター(Forster)をはじめ多くの批評家が、善良なユダヤ人はフェイギンを創造したことへのディケンズの償いと主張してきた(371)。確かに、

ライアの善良さやユダヤ民族の苦境に関する彼の熱弁が大仰であることなどを考慮すると、その可能性は捨てられない。しかし別の理由として、イギリス社会全体の変化も考えられる。『オリヴァ・トゥイスト』が連載された1830年代から『互いの友』の1860年代の間に、イギリス社会はユダヤ人たちに対して寛容になった。例えば、1833年にユダヤ人が弁護士になることが可能になり、1841年にはユダヤ人に初めて世襲制の爵位が授与され、1855年にはユダヤ人のロンドン市長が初めて登場した。さらに、ユダヤ人に対する変化を象徴するかのよう、1858年にはユダヤ人が「キリスト教徒として」という宣誓をせずに国会の議員席に着くことを許された。このような社会の変化に伴い、ディケンズの態度も和らぎ、それが彼の描くユダヤ人に反映したとも考えられる。だが、そもそも、フェイギンとライアから読み取れる作者のユダヤ人観には、2人の性質の違いに見られる程の大きな相違はあるのだろうか。

フェイギンの場合と同様、ライアは「ユダヤ人」と呼ばれることが多い。さらに、彼の行動が「彼の民族のもともとの本能から」(279)と説明されたり、彼の主人への忠実さが「彼の民族の感謝の念は深くて強くて消えない」(282)と語られたりする。ライアは1人のユダヤ人というよりも、ユダヤ人の代表として描かれる。そのうえで、ライアは彼が「キリスト教徒の若い紳士」(277)や「キリスト教徒の主人」(275)と呼ぶフレジビー(Fledgeby)と対比される。「キリスト教徒の服装」に着替え、「お清め」をし、「聖油を塗って」(432)出かけるフレジビーは、表向きは気の良い粋な紳士である。だが実体は、ユダヤ人のライアを隠れ蓑に使って、容赦なく金を搾り取る狡猾な金貸しだった。このフレジビーとライアを対比関係に置き、前者こそがユダヤ人の典型とされてきた冷酷な金貸しだとすることで、ディケンズは無慈悲な拝金主義者のキリスト教徒を批判している。

ディケンズは伝統的なユダヤ人像、換言すれば、キリスト教徒が抱いてきたユダヤ人への偏見を逆手に取り、それをキリスト教徒の人物造形に用いている。『オリヴァ・トゥイスト』でのユダヤ人像と比較したとき、確かにディケンズのユダヤ人に対する態度が穏やかになったと感じられる。だが、このことから、彼が読者のユダヤ人への偏見を払拭しようとしていたとまでは言えない。同じ小説中で、ライアを愚弄する「キリスト教徒の紳士」(405)ユーゼーン(Eugene)は、最終的に自身の道徳的退廃の罰を受けたあとに再生するにもかかわらず、ライアを愚弄したことに関しては、制裁を加えられたり悔い改めることがないからだ。ヘラー(Heller)が主張するように、『互いの友』執筆中のディケンズにとって、反ユダヤ主義は

決して重要な問題ではなかったと考えられる(59)。むしろ、たとえ読者の偏見を利用しただけだとしても、キリスト教徒の墮落をユダヤ人のイメージに擬^{なぞら}えて描く発想自体に、ユダヤ人に対する差別的な見方が感じられる。また、物語の最後に、善良なキリスト教徒のボッフィン(Boffin)夫妻の寛大さから遺産がジョン・ハーモン(John Harmon)に譲られ、さらにそれが他の登場人物たちに分配される。そのとき、受け取り人のなかにリジー(Lizzie)とレン(Wren)が加えられる。このキリスト教徒の娘達を守り続けてきたのはライアだったのに、そうすることでディケンズは最終的に、彼女達の庇護者をキリスト教徒へと移している。ユダヤ人がキリスト教徒の庇護者のままでいることを許していない。それだけでなく、ライアにも遺産分配の恩恵を与えることで、彼をもキリスト教徒の庇護下、言い換えれば、キリスト教徒の下位に置いている。

『オリヴァ・トゥイスト』の約10年後の手紙のなかで、ディケンズはある衣装屋について、「彼はユダヤ人ですが、ユダヤ人にしては実にとても品があるやつです」(*Letters* 6: 186)と述べている。『互いの友』連載の4年前の手紙では、先に言及したデイヴィス夫人の夫の事務弁護士を「金貸し」と呼び、そのうえ、ディケンズのロンドンの邸宅だったタヴィストック・ハウスを彼が購入することに触れて、「金を払い終わるまで、私は彼を絶対に信用しません」(*Letters* 9: 289)と言っている。『オリヴァ・トゥイスト』以後もディケンズには、ユダヤ人に対する偏見があり、『互いの友』に至っても、それは払拭されてはいなかったのである。『互いの友』連載以降に行われた『オリヴァ・トゥイスト』の改訂に関して、同様のことが言える。1867年版でディケンズは、フェイギンを指していた「ユダヤ人」という言葉を幾つも、固有名詞「フェイギン」に書き換えた。しかし、ディケンズが「ユダヤ人」を「フェイギン」に変更し始めたのは小説の中盤からだ。すなわち、これら2つの言葉が読者のなかで不可分なものとなってから変更がなされている。それゆえ、この改訂からディケンズがユダヤ人に対する偏見を改めたとは断言できない。

ライアに関しては、さらに重視すべきことがある。それは彼がキリスト教徒化されて描かれていることだ。狡猾な金貸しの傀儡となって「自分の古くからの信仰と民族」(726)の面汚しをするのを止めようと決意した後で、ライアはフレジビーが怪我で苦しんでいることを知り、助けに行こうとする。そのときレンに、あんな奴の看病に行くなんて「本気で良きサマリア人を信じていると思われるわよ」(727)と引き止められる。このときレンの言葉は、ライアの行動を良きサマリア人の行動と結びつける。確か

に、この直後にライアは「人を助けるのが我々の習慣なんだ」(728)と説明し、自分の行動をユダヤ人やユダヤ教徒的なものとして定義し直そうとしている。しかし、別の場面ですでに、ライアの姿が良きサマリア人と重ね合わされていた。弟からひどい仕打ちを受けて泣いているリジーのそばを通ったとき、ライアは「何事もないかのように、ここで一人で泣いているあなたをほって通りすぎることはできない」(404)と言い、彼女を家まで送る。このときのライアは、道に倒れている人に気づきながらも「道の反対側を通りすぎて行った」(Luke 10: 31-32)人たちとは違い、その人に声を掛け宿屋まで連れて行った良きサマリア人を想起させる。それゆえ、レンの言葉にもライアの善行にキリスト教徒的な行動という印象を与えようとする作者の思惑が感じられる。良きユダヤ教徒のユダヤ人だと語られるライアだが、結局は彼が優しく寛大である(gentle)ことがキリスト教徒的(Gentile)なことにされている。

3 . スクルージ

ここまで、ディケンズの代表的なユダヤ人を考察してきた。それでは、『クリスマス・キャロル』のスクルージはどのように描かれているのだろうか。

スクルージには、彼の「分身」だと言われるマーレイ(Marley)の「ジェイコブ」という名と同じように、「エビニーザ」というヘブライ語系の名がつけられている。そして、スクルージは金貸し業を営む無慈悲な吝嗇家であるから、冷酷で強欲な金貸しというユダヤ人像の原型と符合する。さらに、拝金思想に染まっていくスクルージ青年に婚約者が別れを告げる場面では、彼女がスクルージに、あなたのなかで「新たな偶像(Another idol)」、すなわち「黄金の偶像(A golden one)」が「私に取って代わった(displaced me)」と嘆く(34)。「ジェイコブ」という名前がヘブライ語で「取って代わるもの(supplanter)」を意味するように、ジェイコブのような性質が本来のスクルージの性質に取って代わったのだ。そして、ここで留意すべきことは、この場面には「黄金の像」崇拜のイメージがあり、旧約聖書の「黄金の子牛像」を崇めたイスラエル人(Exod. 32)を想起させることである。スクルージはイスラエルの民と重なり合う。

また、スクルージは、クリスマスを「くだらん(Humbug)」(9)と一蹴し、それを祝う奴らを「プディングと一緒に釜で茹で、ヒイラギの枝を胸に刺して埋めてやりたい」(10)と言う人物でもある。彼は、「その神聖な

る名前とその起源に払われるべき当然の畏怖の念」(10)、つまり、キリストへの畏怖の念とは切り離せないと語られるクリスマスを嫌い敵視している。彼が貧しい人への募金を拒む場面では、それが「大勢の人にキリスト教徒が享受すべき精神的、肉体的喜び」(12)を与えるのを拒んだこととして語られる。小説の冒頭では、スクルージが「強欲な年老いた罪びと(covetous, old sinner)」(8)と表現され、彼の吝嗇漢ぶりが7つの大罪の1つの「強欲(covetousness)」と結びつけられている。これらの描写も、スクルージの反キリスト教的性質を示唆している。『互いの友』でライアがフレジビーに「ユダ」(431, 563)と呼ばれることから分かるように、キリストと彼の教えへの敵対者というのは、ユダヤ教徒の人物像の1つである。そしてスクルージの反キリスト教的という人物像は、この人物像に繋がる。さらに、小説中で少年がスクルージに“God bless you, merry gentleman!”(13)と歌い、追い払われる。これは“God rest you merry, gentlemen”(Poston 72-73)で始まるキャロルの引用である。しかし、小説では句読点の位置に変更が加えられ、“gentlemen”が“merry gentleman”になっている。動詞が異なっているために、“God Rest You Merry”というキャロルが編曲されたものを使っている可能性はあるが、スクルージにユダヤ性があることを考えれば、ユダヤ人フェイギンの渾名として使われていた“merry gentleman”を思い起こさせる。

このようにスクルージにはユダヤ性が読み取れる。だが、彼がユダヤ人だとは明言されない。それには理由がある。この小説では時おり人間一般を指す“man”という言葉で呼びかけられることのあるスクルージには、人類の代表者という側面があり、彼の道徳的復活を描いているこの小説は普遍的な教訓譚として読める。また、彼は金銭という物質的なものしか重視せず、マルサスの主張を支持するような「救貧院に行くなら死んだほうがましだと言うのならばそうすればいい。余分な人口を減らせばいいんだ」(12)という発言や、自由放任主義を想起させる「人は自分の仕事分かっている、他人の仕事に干渉しなければいいんだ」(12)という発言をする。彼はヴィクトリア朝社会に蔓延していた功利主義や自由放任主義の体現者という側面を持ち、この小説は当時の社会を批判した社会小説としても読める。もしスクルージを、当時の多くの読者に道徳的に劣った異人と見なされていたユダヤ人だと明言してしまうと、この小説の普遍的な教訓や社会批判が損なわれてしまう。だからディケンズは、主人公をユダヤ人だと断言することを避けた。先に挙げた「黄金の子牛像」崇拜のイメージも、その第一の目的は、スクルージの拝金主義を示すことにある。そして、

その拝金主義をより効果的に伝えるために、冷酷な吝嗇家というイメージを持つユダヤ人の姿をスクルージに重ねたのだ。ディケンズはスクルージを通してユダヤ人を描こうとしたのではなく、ユダヤ人が喚起する否定的なイメージを無慈悲な吝嗇漢を描くのに利用しただけである。

スクルージは精霊たちと過去、現在、未来を旅する。その旅のなかで、スクルージが安息日厳守主義について現在の精霊と議論する。スクルージが精霊に、安息日を厳守させるために、貧しい人たちから休日のささやかな楽しみを奪おうとすることが「あなたの名前や少なくともあなたの家族の名前で議論されている」(43)と批判する。それに対して精霊が、それは我々でなく、「我々の名で」自らの欲望やわがままを押し通そうとする輩の所業だと反論する(43)。この場面から分かる通り、スクルージを導く精霊たちはキリスト教と深く関わる存在である。

この精霊たちに見せられた様々な光景から、スクルージは教訓を学び、同情心や慈悲や人間らしい感情を取り戻してゆく。そして、「これからはクリスマスを崇め、一年中それを祝う努力をします」という言葉で始まる精霊への「最後の懇願 (a last prayer)」(70)をする。すると、精霊の姿は消え、スクルージはその日がクリスマス当日であることを知り、真っ先に、彼の商会の貧しい事務員ボブ (Bob) の息子ティム坊や (Tiny Tim) のために巨大な七面鳥を贈る。それ以降も、彼がボブの家族のために助力を惜しまず、ティムの「第二の父親」(76)になることが語られる。

マーレイは、「賢者たちを貧しい住まいへ導いたあの神聖な星」(21)に目を向けなかったがゆえに、死後に鎖に繋がれて地上をさまようことになり、自分と同じ運命を回避させるために、スクルージのもとに3人の精霊を送った。そのおかげでスクルージは、「教化」(26)され、「ボブ・クラチットの貧しい家」(66)の息子ティムの第二の父親になった。東方の3博士がキリストの生まれた「貧しい住まい」に着いたのに対し、スクルージは3人の精霊に導かれて、従来の批評で指摘されているようにキリストの分身や幼児キリストであるティムの「貧しい家」に辿り着いた。精霊との「交信」(76)の後、スクルージは、ただ陽気にクリスマスを祝う善人になったのではなく、キリスト教精神に目覚めたのだと解釈できる。

未来の精霊がスクルージに見せた場面で、ボブの長男で十二使徒の1人と同じ名のピーター (Peter) が、「イエスが1人の子供を呼び寄せ」(66)という聖書の一節を読み上げる。聖書ではこの後に、「心を入れ替え幼い子供のようにならない限り、天の王国に入ることはできない。(中略)私の名においてこのような幼い子供を受け入れる者が私を受け入れるのだ」

(Matt. 18: 3-5) というキリストの言葉が続いている。最終章でスクルージは「幼い子供」ティムを受け入れるうえに、心を入れ替え「赤ん坊」(72) のような気分になる。これらのことを合わせ考えると、ピーターが読み上げた聖句は、スクルージがキリストを受け入れ、天の王国に入るに相応しい人間になることを暗示していると言える。最終章で、スクルージが外出して最初に訪れる場所が「教会」(74) であることも、彼のキリスト教徒化を示唆している。

結論

ディケンズのユダヤ人やユダヤ性の描き方には、主に次の2つの特徴があった。1つ目は、ユダヤ人あるいはキリスト教徒の邪悪さや墮落を表現する有効な手段として、伝統的なユダヤ人像の原型を使っていること。ディケンズは、登場人物の性格を端的に示すために既存のユダヤ人のイメージ、換言すれば、その根底にある読者のユダヤ人への偏見を利用して、彼にとってユダヤ性とは、人物造形のための便利な技法や象徴であった。2つ目の特徴は、ユダヤ人は常にキリスト教徒たちと対比関係に置かれること。ユダヤ人たちはユダヤ人自身について何かを語るのではなく、キリスト教徒の登場人物を批判し、キリスト教精神を称揚するために存在していた。ディケンズは、ユダヤ人登場人物をユダヤ人一般とすることで、1人の独立した人間としてのユダヤ人を描かなかただけでなく、ユダヤ人自体について語ることを目的としたユダヤ人をも描いていなかったのだ。ディケンズの小説の大義は、読者、限定すればイギリス国民の温かい人間性を喚起し社会を改善することにあった。その小説のなかで、ユダヤ人は作者が道徳的主張を行うための手段以上のものにはならなかった。それは彼には、ユダヤ人を自分たちとは異質の他者だとする感覚があったからだろう。ユダヤ人をキリスト教徒と対比する発想そのものに、ユダヤ人に対する作者の排他的な感情が見られる。しかし、ディケンズがライアの善良さをキリスト教に帰結させていたことは、このこと以上に重要である。なぜなら、フェイギンとは対極的なユダヤ人を描いたと言われる最後の小説においても、ディケンズは純粹に善良なユダヤ教徒のユダヤ人を描けなかったからだ。

『クリスマス・キャロル』でディケンズは、スクルージをユダヤ人的な人物として描くことで、彼の無慈悲さや拝金主義という道徳的墮落を顕在化させようとした。翻って言えば、登場人物の道徳的墮落を明確にするた

めに、ユダヤ人が持つ否定的なイメージを利用したのだ。ここにもやはり、ディケンズのユダヤ人に対する偏見が感じられる。さらに、改心前のスクルージと改心後のスクルージは、ユダヤ人的なスクルージとキリスト教精神に目覚めたスクルージであり、彼の人物造形にはユダヤ人とキリスト教徒の対比が読み取れる。そのうえ、善人への変身がキリスト教への回心として描かれている点で、彼は善良な人物であるためにキリスト教徒化されるライアの登場を予言している。このように見てみると、スクルージには、上で挙げたディケンズが描くユダヤ人の特徴が表れていて、それらがこの1人の登場人物のうちに集約されている。それゆえ『クリスマス・キャロル』はディケンズのユダヤ人観を伝える作品の1つだと言える。

引用文献

- Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales. The Riverside Chaucer*. Ed. Larry D. Benson. 3rd ed. Boston, MA.: Houghton Mifflin, 1987. 3-328.
- Daleski, H. M. "Seasonal Offerings: Some Recurrent Features of the Christmas Books." *Dickens Studies Annual* 27 (1998): 97-111.
- Davis, Paul. *The Lives & Times of Ebenezer Scrooge*. New Haven: Yale UP, 1990.
- Dickens, Charles. *A Christmas Carol. Christmas Books. The Oxford Illustrated Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1987. 1-76.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Madeline House, Graham Storey & Kathleen Tillotson. The Pilgrim Edition. Oxford: Clarendon, 1965-2002.
- . *The Life of Our Lord with Foreword by Lady Dickens*. Sandy, UT.: Quiet Vision, 2004.
- . *Oliver Twist*. Ed. Kathleen Tillotson. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1999.
- . *Our Mutual Friend*. Ed. Michael Cotsell. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens. Household Edition. 1872-74*. London: Chapman & Hall, n.d.
- Grossman, Jonathan H. "The Absent Jew in Dickens: Narrators in *Oliver Twist*, *Our Mutual Friend*, and *A Christmas Carol*."

Dickens Studies Annual 24 (1996) : 37-57.

Heller, Deborah. "The Outcast as Villain and Victim: Jews in Dickens's *Oliver Twist* and *Our Mutual Friend*." *Jewish Presences in English Literature*. Ed. Derek Cohen & Debora Heller. Montreal: McGill-Queen's UP, 1990. 40-60.

Lane, Lauriat. "Dickens' Archetypal Jew." *PMLA* 73 (1958) : 94-100.

Poston, Elizabeth, ed. *The Penguin Book of Christmas Carols*. 1965. Harmondsworth: Penguin, 1986.

Stone, Harry. "Dickens and the Jews." *Victorian Studies* 2 (1959) : 223-53.

Vogel, Jane. "A *Christmas Carol* and the Conversion of the Jews." *Readings on A Christmas Carol*. Ed. Jill Karson. 1977. San Diego: Greenhaven, 2000. 140-44.

Abstract

Jews and Christians in Dickens's Writings

HASEGAWA, Masayo

Many critics have long discussed Dickens's attitude toward Jews and their interest has focused principally on Fagin in *Oliver Twist* and Riah in *Our Mutual Friend*. This essay widens that focus to include Scrooge in *A Christmas Carol*, demonstrating that he is one of the revealing sources for understanding Dickens's views of Jews.

Dickens has two characteristics in his ways of depicting "Jewishness" throughout his writings. One is that he utilizes stereotypes of the Jew embodying the long history of anti-Semitic emotions to define his characters' villainy. The fact indicates that Dickens could not expunge anti-Jewish prejudices which had been deeply imprinted upon him, though his feelings about Jews softened. The other is that Dickens compares Jewish characters with Christians in order to comment on the latter, and besides to preach Christian mercy and charity. The function of Jewish characters is not to narrate something of their own race and religion, which stems largely from

Dickens's negligent attitude toward Jews, or rather from his view of them as outsiders. Yet what we must emphasize is not his intolerance but the absence of a good Judaistic character in his work. Although portraying Riah as a virtuous Jew, Dickens attributes his virtues to his Gentile spirit.

A Christmas Carol draws on some anti-Semitic stereotypes to highlight Scrooge's mammonism and mercilessness, contrasting Scrooge as a Jewish money-lender with Scrooge as a merry, good Christian. Although he is never referred to as a Jew, Scrooge displays the characteristics of Dickens's handling of "Jewishness." In other words, Scrooge is a character who encapsulates Dickens's views of Jews. Moreover, Scrooge, whose moral regeneration is depicted as his conversion to Christianity, is a herald of Riah who is good because of being Christianized. That is, *A Christmas Carol* is one of the writings telling us how Dickens saw Jews.

『中国四国英文学研究』第3号
(日本英文学会中国四国支部, 2006)
pp. 33-46.